

# 『武道伝来記』 卷一の一「心底を弾琵琶の海」の検討

― 本能寺の変の位置づけ・明智光秀への視線 ―

羽 生 紀 子

はじめに…仮想世界の設定

私は『武道伝来記』卷一の四「内儀の利発は替た姿」、卷五の一「枕に残る葉違ひ」の二章の作品構造について検証し、未完成といわざるを得ないものの、第一層（素材）、第二層（本話）、第三層（背景世界）という三層構造が試みられていることについて、すでに論じた（注<sup>1</sup>）。

前田金五郎氏は『武道伝来記』の十三章の素材・典拠を指摘し、『武道伝来記』はその素材の年代である「中古」（寛永・正保ごろまでを含む時代）、近世初期のモデル小説、歴史小説を意図するものとしていた（注<sup>2</sup>）。この前田氏の見方は素材論のあり方として正当なもので、長く認められて来たものであった。それに対して、谷脇理史氏は、前田氏の素材とするものにもいくつかの疑問を呈し、それは当世のこととして描くことをはばかった結果で、『武道伝来記』を当世の話題を集めた「文字通りの浮世草子」として位置づけた（注<sup>3</sup>）。『武道伝来記』を歴史小説と捉える前田氏に対して、全く逆の捉え方である。

私は、卷五の一、卷一の四の検討において、前田氏のいう「中古」（寛永・正保ごろまでを含む時代）にこだわる必要はなく、また谷脇氏

の、当世のこととして書くことをはばかるという、カムフラージュの手法は首肯しえないことを論じた。卷五の一、卷一の四の素材を新たに指摘し、その作品構造を説明したのである。

本稿では卷一の一「心底を弾琵琶の海」を検討する。『武道伝来記』の巻頭章ということから、従来から多くの解釈が示されている。『武道伝来記』の序文と作品内容の乖離やそれに伴った主題に関する論考が多いが、今はその詳細には触れない。というのも、後述するいくつかの論考は別として、少なくとも巻頭章の構造を説明し、西鶴が本話に嵌め込んださまざまなシグナルを正面からとりあげた論考は見出せないからである。例えば入道して遁世する平尾修理という最も重要な登場人物について、そのモデルを追究した論考はない。後述するように、「安土の城下は、むかしになりぬ」「五十五歳の時、入道して眼夢と改め」が、当時の明智光秀についての巷説による設定であること、その他いくつかの文辞をシグナルと捉えれば、そのモデルが、本能寺の変で織田信長を弑した明智光秀であることは明らかなのである。しかし山崎の合戦の後山科で殺された光秀の入道・遁世などという設定は、史実としては明らかに誤りであり、そのような光秀が眼夢のモデルであるという設定は理解し難いだろう。そ

のような解釈は、作品構造の解明を伴わなければ到達しえないのである。

西鶴は『武道伝来記』に後続する『新可笑記』（元禄元年（一六八八）十一月刊）、『本朝桜陰比事』（元禄二年正月刊）において、本話にさまざまなシグナルを嵌め込み、読者がその謎に因應することを要求していた（注4）。先行する貞享四年（一六八七）四月刊の『武道伝来記』においても、同様の創作方法が取られていると考えられるのであり、そのことについて、巻五の一、巻一の四において検証した。

巻一の一「心底を弾琵琶の海」を一読すると、その後半部分の敵討談は別として、前半部分は不可解な状況設定であることに気付く。大名家の当主がすべてを捨てて出家・遁世するという異常事態には、現実の世界でないような違和感を抱く。雅文調で、多くの典拠のある文辞が散りばめられていることも影響している。そこには、すでに論じた『新可笑記』巻一の四「生き肝は妙薬のよし」との共通性がある。西鶴は、『新可笑記』巻一の三「木末に驚く猿の執心」では、猿の復讐譚を巧みに利用して奇談を装いながら、武士の宿命との対応を描いていた。巻一の四では、謡曲の夢幻の世界を利用して、生き肝殺人があつたかのように描き、実はそのような凄惨な事件は、旅僧（武士）と孝行娘の夢幻の中の出来事であるとしたのである。生命を果たそうとし、一方で孝行を実践しようとする娘を殺害することとの矛盾・衝突を描いていたのであり、生き肝殺人そのものは否定したのであつた。重層世界として三代將軍徳川家光と保科正之の新しい主従関係を重ねていたが、その主従関係においては、殉死は否定されなければならなかつた。殉死を生き肝殺人に重ね、それは遠い「戦国の余習」であるということを、謡曲の夢幻世界を構造

的に利用することによって描いたのであつた（注5）。西鶴は奇談や夢幻世界を利用することによって、時代的な武士のあり方の変遷、武士道の相違という困難な課題を解決しようとしていたのである。

井上泰至氏は、巻一の一「心底を弾琵琶の海」の前半部分で、采女・左京が「簀笠に身を隠し、其ま、釣の翁となりて、琵琶・琴ひきつれて」出家した眼夢を訪れる場面について、「こは謡曲『白髭』のパロディになっている」と指摘した（注6）。詳細は後で触れるが、この脇能物『白髭』のあらすじは次のようなものである。

帝に霊夢があり、白鬚明神へ、勅使が立つ。白鬚の宮に着くと、釣りをする翁と若者に出会う。翁は、この地は祇尊に与えられた仏法結界の地であるという白鬚明神の縁起を語る。（中入）夜もすがら奇特を待つ勅使の前に、容貌魁偉な白髭の神が出現、勅使を慰めようと舞楽を奏し、空から天女が天燈を捧げ、湖水から龍神が龍燈を捧げて顕れ、燈明を神前に供えて舞をくりひろげる。

井上氏は、『類船集』の「老翁」の付合に「釣」「清見原天王鈴鹿山に入老翁に宿かり給ふと也」とあり、眼夢が天武天皇の血を引く高家に設定されていることと通じると注している。首肯すべき重要な指摘であるが、問題は、この脇能物『白髭』のパロディが、巻頭章の作品構造として重要な手法であるということに論が及んでいないことである。翁が明神として現れて縁起を語る。この地は祇尊の選んだ仏法結界の地であるという、その地には正当性が付与されているのである。白鬚明神の地、それは「比叡山の麓、志賀の浦のほとり」（謡曲『白髭』）、琵琶湖西岸の坂本城（明智光秀の居城）につながる。それは眼夢の遁世の地としなければならぬ。翁、白髭

明神が、眼夢の立場を正当化していることになる。それは今眼前の現実の問題ではない。眼夢の心にある仮想世界においてということになる。そのことは、「其比、平尾修理といへる人」以下の情景、出来事が仮想世界の出来事ということであるが、それは巻頭章に取り上げるべき、武士のあり方、主君への謀反という大きな問題に対する西鶴の視線なのである。

金栄哲氏は、「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理」に注目し、『平家物語』の巻三「法皇被流」から「城南之離宮」が踏まえられていると指摘し、『武道伝来記』の背景には『平家物語』の世界があると論じている（注7）。後述するように、具体的な指摘には首肯しえない部分が多いものの、後白河法皇を幽閉した平清盛は、織田信長を弑した明智光秀に相当する。「江はよく舟をうかべ」云々は、杜牧「阿房宮賦」の引用と、「世の替れる有様、覚る間もなき夢なり」とある文辞に続いている。それは、秦の始皇帝と項羽の関係を読み取らせた上で、清盛の後白河法皇幽閉を想起させようとするものであろう。

以上のように、巻頭章は仮想世界を設定して、主君への謀叛という武士にとつての最大の問題を取り上げて、武士の忠義とは何かを追究している。本稿は、そのような巻頭章の構造と主題を明らかにするものである。

#### あらずじ…「安土の城下は、むかしになりぬ」とは

作品構造を明らかにするにあたり、まずあらずじをとる。冒頭文と①から③の三段落に加え、②は便宜上（ア）から（ウ）の三つに分ける（注8）。

「武士は人の鑑山、くもらぬ御代は久かたの松の春、千鶴万亀のすめる江州の時津海、風絶て、浪に移ふ安土の城下は、むかしになりぬ」。

①「其比、平尾修理といへる人、天武天皇の末裔にして高家なれば、諸役御免あつて、世を遊樂に其名を埋み、五十五歳の時、入道して眼夢と改め、其後は、長剣・馬上をやめて、禪学にもとづき、常の屋かたをはなれ、にしかた山陰に、小笹かり葺の庵むすべば、仏のえんに引かれ、生死目前の湖、是則弘誓の丸木船、一大事踏はづしては有べからずと、観念の南窓に諸釈を集めて、見台氣を移し、板戸内よりしめて、人倫かよひ道なく、それ御姿を見ぬ事、百日にあまりて、すゑの者、是を歎きぬ」。眼夢の屋敷は訪れる人もなく、「市中の山居是なるべし」。

②（ア）眼夢は妻女を持たず子孫の願なく、「美童を愛し給へり」。筋目正しい浪人の子「森坂采女・秋津左京、此武人、同年にして十六才、心も形も、是程かはらぬ生れつきはなし」を愛した。采女・左京は「互に衆道の義理を恥かはし」、「若命を惜まず、骨髓に徹して勤めける事、色ばかりには非ず」。その時節には「自然の御用にも立ぬべき心底」であった。「おもひのほかなる主人の御発心」であつたので、二人は、お会いせずには別れられるだろうかと思うが、この頃は病氣ということを聞き、石山寺に観音経を供え、多賀大明神に小松を植えさせて祈願している。病が重くなつていくということなので「今は仰せをそむき、戸ざし引破りてかけん、御面影拝み奉らん」と思うが、「爰は又分別所」、「何とぞ今生にて御拝顔すべき事を」と思案して、

「うら人をまねきよせ、棚なし小舟をかりもとめて、二人簀笠に身を隠し、其ま、釣の翁になりて、琵琶・琴ひきつれて、庵室の後ろにまわつた。「糸の音はじめに愁歎ふくみて、いと哀れにぞ聞えし」。

(イ) 眼夢入道は「紙窓を明て見渡し」、「漁父、かゝる者、有明移る南江のおもしろや」と、琴にあわせてお歌いになった。「歌台暖響春光融々、舞殿冷袖風雨凄々。春秋のしづかに、世の替れる有様、覚る間もなき夢なり。しばし是に氣をうつして、江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理、おこなひのさはりなり。明鏡に像の跡なく、虚空の色にそまざるごとく」と戸車の鳴る時、二人は簀笠を脱ぎ、「二人がおもひを晴させ給へ」とさまざま嘆くのであつた。眼夢は、「なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならず」と、なを心底すはり、「爰は方便の偽り、諸天もゆるし給へ」と、「七生までの勘当」とあらけなく言い渡すのであつた。

(ウ) 二人は「子細をたづねたればとて、よもや分ては語らせ給はじ」と、「夢心にて屋敷に入て」、次第に弱つてゐる眼夢の死去を見届けて御供をと思つていたが、「兼て「腹死じふしの事仕るまじき」と、再三の仰せをかうぶりければ、是もまた主命にそむくの道理、武士は命を捨る所をのがれては、其名をくだすなり」。「後光厳院文和元年二月三日に、細川頼春の家来追腹はじめて、今和朝の手下として、其はまれ世に高し」。「只我々は、先腹切て、死出の山路の案内せん」と日を定め、采女・左京は「銘々に腹二文字に引捨、その後互いに「只今」と刺し貫いた。その声に人々が駆け込んだが、「二人ながら、中眼にひらき笑

へる顔ばせ、つねにかはらず」。眼夢に申し上げると取り乱し、「勘当せしも、汝等が命の程をおしみて、さまぐ申せしもあだとなり、我に先立心底、さりとて武士の子なり。老足なれ共、此道は追付べし」と左京の脇差を取るも皆に押しとどめられたが、それより三日後に亡くなられた。一子もなかったので、「平尾の家絶果ける」。

③「されば、人程心のおそろしき物はなし」。「兩人が首尾、後記にもとまるべき事なるに」、同じ近習の閨屋為右衛門は以前左京に執心し、ついには左京に人前で「一分立ぬ程に返事」されたにも関わらず、おめおめとそのままで済ませていた。左京が相果てたので、「跡形もなき悪名をさへづり」、国中に噂した。左京は命を惜しんで「主人御恨みあれば、暇乞すて他国」しようとしたが、采女にとどめられ、義理に責められて切腹したというのである。ある時、采女の弟求馬のいる一座で、為右衛門は「若道にも各別の違ひあり」と、采女のことをほめた。求馬は、「左京・采女、いづれかあひおとるべき心底にあらず」と、「よしなき流布」したことを責め、「其身のがさじ」と為右衛門を車切りにした。求馬はすぐに左京の弟左膳の宅に行き、あらましを語るうちに、為右衛門の一子次郎九郎が素鎧をひっさげ駆けつけた。左膳は長刀で渡し合つた。求馬は「黒髪撫付て」見物、左膳は次郎九郎を切り伏せ、「今ぞのき道」と二人は一家をつれて、「丹波路に入る」。「古今の稀者、是ぞ」と語り伝えられた。

冒頭文は、巻頭の常套として徳川の世を寿いでいるが、「江州の時津海」は「風絶て」、「安土の城下は、むかしになりぬ」とある。

今の徳川の太平の世は久方であると肯定する一方で、安土の城下は滅びてしまったと、その世を否定したことになっている。それは、安土の世を破滅させた本能寺の変、その後の世の変遷を前提として、徳川の太平の世があるとしているのである。人の鑑であるべき武士のあり方と世の移り変わりは、どのように関わるのであろうか。そのような課題に取り組むことを示しているのが、巻頭の冒頭文なのである。

①は「其比、平尾修理といへる人」から始まるが、この重大な課題に関わる人物としてどのような設定がなされているか、それを読み解くことが巻頭章理解の最大のポイントである。武士の世の変遷と深く関わる人物である明智光秀が眼夢として登場しているのである。西鶴は光秀がモデルであることをさまざまなシグナルを嵌め込んで示している。②は事件の経緯をわかりやすくするために(ア)(イ)(ウ)の三つの小段落に分けた。衆道は武士にとつての特別な関係であり、情誼的繋がりを象徴するものである。それを強調するために、単なる一対一の男色関係ではなく、二人の美童を登場させているが、それは後述の素材『藻屑物語』との関わりが大きい。桜川侍従・即ち堀田正盛の殉死事件を重ねるためのものであろう。(ア)では采女と左京の「衆道の義理」「色ばかりには非ず」というあり方を描く。二人は「釣の翁」に扮して眼夢に拝顔を乞う。(イ)しかし眼夢は、二人との情誼的繋がりを「なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならず」と拒絶するのである。(ウ)そのため、二人は殉死を禁じられていたので「先腹」を切り、あくまで情誼的な繋がりを貫くのである。眼夢の庶幾する武士のあり方と、采女・左京のそれは異なっているであり、②はそのような武士道の違いを描くも

のである。③は後日談で敵討談となる。為右衛門は左京をあしざまに嘲するが、それは情誼的な武士としてのあり方を是としているからである。采女・左京、その弟求馬・左膳も、情誼的な繋がりを第一とする、同様の武士なのである。求馬はともかく、左膳は逃亡する必要があるのだろうか。しかし情誼的な繋がりが受け入れられない時代が到来しており、そのために「丹波路へ入ける」なのである。「古今の稀者、是ぞ」と結んでいるが、眼夢は情誼的繋がりを断とうと苦悩しているものであり、眼夢の庶幾するものではない。眼夢はその志を遂げることはできなかったのである。

以上のように巻頭章は読むべきであるが、それは西鶴が嵌め込んださまざまなシグナルに答えなければ到達しえないものであろう。読者に違和感を抱かせる西鶴の嵌め込んだシグナル、謎かけを列挙すると次のようになる。

- (a) 章題「心底を弾琵琶の海」に見える「心底」は、誰のどのような「心底」なのか。
- (b) 冒頭文の「安土の城下は、むかしになりぬ」から、何を想起させようとしているのか。
- (c) 「其比、平尾修理といへる人」の人物設定は、何によるのか。モデルは誰か。
- (d) 采女・左京の二人の美童が「簑笠に身を隠し、其ま、釣の翁になりて」、眼夢に拝顔しようとするのは何故か。
- (e) 眼夢は琵琶・琴に合わせて一旦は「阿房宮賦」を歌いながら「江はよく舟をうかべ」云々、「おこなひのさはりなり」と窓を閉めようとし、さらに二人の対面を拒絶するのは何故か。
- (f) 二人は殉死を禁じられているので「先腹」を切るが、この



行為にはどのような意味があるのか。殉死の禁令と関わるのか。

(g) 采女・左京という命名には、どのような意図が込められているのか。

(h) 後日談が、「丹波路に入れる」結末となっているのは何故か。

(a) (b) について…衆道に象徴される武士道と眼夢の大願

(a) 章題「心底を弾琵琶の海」に見える「心底」は、誰のどのような「心底」なのか。

章題と目録題に「心底を弾琵琶の海」とあるが、本話には章題・目録題以外に四回「心底」の語が見える。

i 其節は又、自然の御用にも立ぬべき心底、更に申にはあらず、  
ii なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならず」と、なを心底す  
はり、

iii 我に先立心底、さりとては武士の子なり。

iv 左京・采女、いづれかあひおとるべき心底にあらず。

i iii iv は采女・左京の心底であるが、ii は眼夢の心底である。この二つの心底には大きな差がある。ii は、采女・左京が「今生にして、名残の拝顔を御ゆるしあそばされ、二人がおもひを晴させ給へ」と懇願したのに対して、眼夢は「是もと色道のまよひなり。なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならず」と、なを心底すは」と、方便の勘当を言い渡すのである。采女・左京の心底は「二人がおもひ」と言い換えられているが、それは眼夢のいう「色道のまよひ」なのである。眼夢のそれは「大願を破るべき事の道ならず」というように、「大願」「道」なのである。

采女・左京は「銘々に腹二文字に引捨」るが、この「腹二文字」について、安永美恵氏は次のように解釈している(注9)。

書き加えられた「二文字」によって、若衆としての性格を付与したものと考えられる。つまり「恋しく思う」気持ちを表す「ふたつ文字」と、腹の切り方の表現である「・文字」を結び付け、念者を慕う若衆の鑑となるような架空の切腹の方法として「腹二文字」を創作したと考えるのである。

采女・左京の若衆としての心底に注目したもので、首肯すべき解釈であろう。西鶴は、采女・左京の武士としてのあり方を情誼的な「色道のまよひ」とし、眼夢のそれを「大願」を志向するものとして対比しているのである。眼夢の「大願」は、道理・道に到達しようとするものである。巻頭章の主題は冒頭文に集約されるもので、采女・左京の情誼的な繋がりを追い求める「心底」であってはならない。章題の「心底を弾琵琶の海」は、一見若衆二人の心底を描いたかのように見えるが、眼夢の大願、安土の城下を滅ぼしてでも、主君を乗り越えてでも、追究すべき道理に叶う武士の世界を夢見る心底なのである。采女・左京の心底は、それを浮かび上がらせるためのものに過ぎないのである。

(b) 冒頭文の「安土の城下は、むかしになりぬ」から、何を想起させようとしているのか。

章題の「琵琶の海」、冒頭文の「鑑山」「江州の時津海」「安土」という地名は、巻頭章が安土城下の滅亡に関わることを明確に示している。①の「其比」は、「安土の城下は、むかしになりぬ」に続くのだから、安土城下の滅亡の頃というのは明白である。

ところがこの「其比」について、谷脇理史氏は、「新日本古典文

学大系」に次のように注している。

「安土の城下」のころ。「むかし」になったころ、すなわち、「久かたの松の春」(徳川氏の治世下)のころとも見られる書き方だが、以下は安土城下の話となる。実は江戸時代での事件であったものを意図的に信長時代のことにしたために生じた表現のゆれと見ることもできる。↓解説。

解説には、次のようにある。

…やはり、巻一の一も、幕府の制禁を屁理屈で破るような話を当世のこととして書くこととはばかり、あえて「安土の城下」のこととしていると見られるのである。

幕府の制禁とは、寛文三年(一六六三)五月二十三日に出された殉死禁令のことであり、本話が殉死(先腹)を賞賛するものであるので、時代を遡らせて「安土城下」の頃に時代設定したというのである。しかし何故「安土城下」の頃にしなければならぬかについては言及していない。『武道伝来記』は、江戸時代の当世の事件を取り上げていると言う仮説に立つものである。

本章は殉死を賞賛しているわけではなく、また「安土の城下は、むかしになりぬ」は、幕府の制禁をはばかったためとか、何かを意図的にカムフラージュするための設定ではない。すでに(a)の「心底」についての解釈によって、主題は、殉死禁令そのものではなく、眼夢の大願であることを明らかにした。さらに(c)の解釈によって、「安土の城下は云々」の設定は必然であることは明確になる。

(c)について…『明智軍記』の光秀像と西鶴の描く光秀像

(c)「其比、平尾修理といへる人」の人物設定は、何によるのか。

モデルは誰か。

「五十五歳の時、入道して眼夢と改め」は、最大のシグナルである。「五十五歳」「夢」に、(b)の「安土の城下は云々」を合わせると、読者は明智光秀を想起するはずである。

西鶴は元禄六年(一六九三)に没しているので、元禄十五年に出版された『明智軍記』(作者不詳)を見ることはなかった。『武道伝来記』の出版は貞享四年(一六八七)だから、西鶴が『明智軍記』を素材とすることはできない。しかし、西鶴当時の明智光秀像、伝聞や巷説などによって形作られた明智光秀像は、『明智軍記』に集約されていると考えることができる。西鶴も『明智軍記』の光秀像と同じような光秀像を思い描いていたのであろうか。この点を確かめるために、『明智軍記』巻十の光秀の伝を吟味する(注10)。

不仁之人者天罰不<sub>ル</sub>逃<sub>レ</sub>事

(織田信長は、惟住五郎左衛門長秀に、紀州鷺森に籠居する一向宗新門跡教如上人ら一向宗一類を討ち果たすように命じる。長秀は鷺森を取り囲んだが、信長父子が明智に討たれたという知らせによって、囲みを解く。「是ハ偏<sub>ニ</sub>開山親鸞上人、且ハ弥陀如来、明智殿ノ心中ニ入替り給ヒ、箇様ニ敵ヲ亡サレケルニヤト、手ヲ合セテゾ悦<sub>ビ</sub>ケル」)

(近年、織田信長は高野山金剛峰寺に隠れる牢人を召し寄せようとしたが、拒絶され、これも高野山がある故と、和泉・河内の士卒に命じて攻めさせる。「各敵ヲゾ呪詛シケル。一七日ニ充ケルハ六月二日也。此日、信長公御父子京都ニ於テ、生害有シ当日ナリ。誠ニ利<sub>スル</sub>人者、天必<sub>ニ</sub>福<sub>ス</sub>之<sub>ニ</sub>。賊<sub>スル</sub>人者、天必<sub>ニ</sub>禍<sub>ス</sub>之<sub>ニ</sub>トイヘリ」)

去元龜二年ノ秋モ、信長俄ニ比叡山延暦寺ヲ攻崩シ、神社仏閣一字モ不殘焼払、僧俗共ニ殺害シテ、其跡明智光秀ニ賜ヒケル砌リ、以後此山ハ永ク再興不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致由、両度迄仰渡サレシカトモ、元來光秀ハ匠王・山王ヲ信仰シケルニ付、潜ニ二十一社并諸堂仏閣ヲ形計經營シ、因テ人ヲ遣シ、不淨ヲ清メ掃除等ヲ申沙汰シ、彼時分死殘リタル僧綱ニハ、密々手飯ヲ与へ、庵室ヲモ結バセナドシテ、此十余年ノ間憐愍ヲ加ヘシトゾ。其比、人毎ノ夢ニ、猿共夥シク群リツ、水色ノ旗ヲ持、都へ上リ、家々ニ立置ヌト見ヘケルトカヤ。今ゾ知ヌ。信長父子ハ信長殺セリ。更ニ、明智ニ非サル事ヲ。サレトモ定<sub>レ</sub>ル運命有<sub>ト</sub>云伝ヘシハ、誠成哉ヤ。当正月二日ノ夜、信長公御夢ニ鼠出テ、馬ノ腹ヲ喰破リシカバ、其馬忽死ニケリト御覽シテ、自ラ夢ヲ判ジ玉ヒケルハ、今年我<sub>レ</sub>四十九ニテ午ノ歳ナリ。然レバ、子ノ年ノ人有テ、怨敵トナルベキ先表<sub>ニ</sub>モヤ有<sub>ント</sub>思召テ、則、諸國ノ大名并家来・大身ナル輩ノ年共ヲ算サセラレニ、日向守計、子年ニテ当年五十五歳ニゾ成<sub>リ</sub>ニケル。織田殿聞召、此者ハ係<sub>ル</sub>事スベシトモ覺ヘズ。偕ハ虚夢ニテゾ可<sub>レ</sub>有<sub>ト</sub>宣ヒシカトモ、終ニ、光秀ニ討レ給<sub>ケル</sub>コソ不思議ナレ。(以下、省略)

明智日向守最期事附光慶応病死事

(明智光秀は勝竜寺から坂本城へ帰城する)

斯テ、十四日丑ノ刻計、小栗栖ノ里ヲ歴ケル処ニ、郷人共蜂起シテ、落人ノ通ルニ物具剥<sub>ツ</sub>旬<sub>ノ</sub>声シテ、鎗ヲ以テ竹垣ゴシニ無体ニ突タリケル。日向守ハ、馬上六騎目ニ通シ処ニ、薄運ニヤ有<sub>リ</sub>ケン。脇ノ下ヲ撞<sub>ツ</sub>ケル。其時、是ハ何者ナレ

バ狼藉ナリト云ケレバ、郷人鎗ヲ捨皆々北去ス。斯テ、三町計往過タレトモ、彼鎗疵痛手ナレバ、光秀道ノ傍ニ馬ヲ乗、寄、鎗ヲ田ノ中ニ立置ケル。是ハ鎗ヲステ、逃タルト、後人ニソシラレジトナリ。扱、溝尾庄兵衛茂朝ニ申ケルハ、唯今手負タレバ坂本迄ハ行付ガタシ。然レハ、爰ニテ自害セント思フナリ。是ハ辞世ナリ。汝ニ与ヘントテ、鎧ノ引合ヨリ一紙ヲ取出スル。溝尾謹<sub>ニ</sub>デ<sub>ニ</sub>見<sub>ル</sub>ルニ、

逆順無<sub>ニ</sub>二門<sub>一</sub> 大道徹<sub>ニ</sub>二心源<sub>一</sub>  
五十五年夢 覺來歸<sub>ニ</sub>二一元<sub>一</sub>

明窓玄智禪定門

トゾ書ケル。是ヲ讀ケル間ニ、光秀脇指ヲ拔テ、腹ニ文字ニ搔切ケレバ、茂朝驚キナガラ、即、介錯シケリ。進士作左衛門ハ、半町計往延タリシガ、光秀見ヘザルノ間、ソレヨリ引返シ、件ノ体ヲ見テ、偕モ貞連コソ御先ハ可<sub>レ</sub>仕者ナルニ、少モ殿<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>ベキニアズトテ、主君自害ノ脇指ヲ取テ、心元ニ突立テコソ伏ニケレ。比田帶刀則家モ後<sub>レ</sub>馳ニ出来テ申ケルハ、竜鱗ニ附、此年月身ヲ立<sub>テ</sub>世上ニ名ヲ知<sub>レ</sub>シ事、莫<sub>ク</sub>大<sub>ニ</sub>君恩也。今其恩ヲ不<sub>レ</sub>報シテハ、何ヲカ期スヘキ。暫ク待セ給ヘ、御供申サント云<sub>フ</sub>保<sub>ニ</sub>、自ラ首ヲ搔落シ、光秀ノ死骸ニ抱<sub>テ</sub>付テゾ死ニケル。(以下、省略)

明智光秀の享年については諸説ある。野口隆氏は、『明智軍記』

以前の十一の資料を検証し、次のようにまとめている(注1)。

以上の状況から知られるのは、『明智軍記』の刊行以前に、光秀の没年として五十五歳・五十七歳・六十三歳・六十七歳の少なくとも四説があり、また光秀を子年とする占夢譚が既に存在



していたことである。四説のうちでは五十七歳を採る文献がむしろ主流で世上に流布していたにもかかわらず、『明智軍記』が五十五歳を採ったのは、占夢譚との整合性を優先したためなのではないか。そして光秀辞世の「五十五年夢」の一句も、いつから存在したのか未詳だが、占夢譚に合わせて創作され挿入されたものである可能性があるだろう。

野口氏の整理によれば、五十五歳説を採るのは次の資料である。

・第二、『群書類従』所収『明智系図』（寛永八年（一六三一）辛未六月十有三日の識語）。「享禄元歳戊子三月十日于濃州多羅城誕生」とあることから、計算上五十五歳没となる。

・第三、『陰徳記』（香川正矩編、万治三年（一六六〇）以前成立）。光秀は信長の六歳上とあることから五十五歳と算出することができる。信長の占夢譚あり。

・第十一、『総見記』（外題『織田軍記』、遠山信春編、貞享二年跋、三年序）。行年五十五歳とある。

五十五歳、占夢譚は『明智軍記』の創作ではなく、先行文献があることになる。ただし、野口氏は『陰徳記』は香川家所蔵の草稿本等、特殊な本ばかり伝存しており、「世上に流布した形跡がない」ので、「他にもこの占夢譚を載せた文献が存在したか、あるいは口碑等の形で普及していたもの」か、と推定している。

野口氏は、検討資料の第九として『黒田家譜』（貝原益軒編）の次の記事を挙げる。

光秀手を負ひければ、持ちたる鎧を田の中に立て置きて逃げたりける。鎧を立て置きし事は、鎧を捨てて逃げたりといはれじとなり。…光秀は此時五十七歳なり。（孝高記巻二）

『黒田家譜』は延宝六年（一六七八）に一旦完成したが、以後増補改訂されたものである。この記事は、元禄十五年（一七〇二）刊の『明智軍記』から取り込んだものか、当初からあり逆に『明智軍記』が取り込んだものかは定かでない。益軒は野口氏の挙げる第八資料『和漢名数』（貝原益軒編、延宝六年刊）は「明智光秀（六十三）」としている。益軒は、延宝六年当時の完成本であれば、五十七歳ではなく六十三歳としているはずであろう。六十三歳としていないことからは、おそらく『明智軍記』の当該箇所を引用し、光秀の享年説として有力になっていた五十七歳に書き替えたとするのが自然な解釈なのである。五十七歳とすれば「五十五年夢」の辞世を取り込むことはなかったはずである。益軒が五十七歳説を取り、辞世を省いたということは、その辞世が『明智軍記』のみに見えるもので、偽作であると判定したためであろう。『明智軍記』は、光秀の敗走という史実は踏まえながら、武士として非難されないように鎧を田の中に立てて置いたという逸話および辞世を、光秀像を道理を重んじる立派な武士らしく仕立てるために創作付加したと考えるべきものであろう。『明智軍記』が光秀像を立派な武士らしく仕立てているのは、その明智光秀を称揚する立場からは当然と考えられる。

『明智軍記』「不仁之人者天罰不逃事」では、<sup>i</sup> 鷲森一向宗の討伐、<sup>ii</sup> 高野山金剛峰寺の討伐、<sup>iii</sup> 比叡山焼討ちなどの史実に、それぞれ光秀を絡ませている。

i 「是ハ偏ニ開山親鸞上人、且ハ弥陀如来、明智殿ノ心中ニ入替り給ヒ、箇様ニ敵ヲ亡サレケルニヤト、手ヲ合セテゾ悦ケル」  
ii 「各敵ヲ祝詛シケル。一七日ニ充ケルハ六月二日也。此日、信長公御父子京都ニ於テ、生害有シ当日ナリ。誠ニ利人者、

天必<sup>スサイハイ</sup>福<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>。賊<sup>スル</sup>人<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、天必<sup>スワサハス</sup>禍<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>トイヘリ」

iii「其<sup>レ</sup>比<sup>ニ</sup>、人毎<sup>ノ</sup>夢<sup>ニ</sup>、猿共<sup>ヲ</sup>夥<sup>シク</sup>群<sup>リ</sup>ツ、水色<sup>ノ</sup>旗<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>都<sup>ヘ</sup>上<sup>リ</sup>、家々<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>置<sup>ス</sup>ト見<sup>ケ</sup>ルトカヤ。今<sup>ゾ</sup>知<sup>ヌ</sup>。信長父子<sup>ハ</sup>信長殺<sup>セ</sup>リ。更<sup>ニ</sup>、明智<sup>ニ</sup>非<sup>サル</sup>事<sup>ヲ</sup>。サレトモ定<sup>サズ</sup>レル運命<sup>ヲ</sup>ト云<sup>フ</sup>伝<sup>ヘ</sup>シハ、誠<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>哉<sup>ヤ</sup>。」

「不仁之人者天罰不逃事」の「不仁之人」は、織田信長のことであり、信長が本能寺で明智光秀に討たれたことを「天罰」としてゐるのである。光秀は、i「親鸞上人且ハ弥陀如来」が入れ替わつたものであり、ii「天必<sup>ワザアヘ</sup>禍<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>トイヘリ」と「天」の代行者であり、iii猿が明智の「水色の旗」を持つて都へ上る夢、「明智ニ非サル事ヲ」「運命」だとしている。

明智光秀による本能寺の変を正当化するために、信長を仏敵とし、それに天罰を下したのが光秀であるという見方は、『明智軍記』ならではのものであろう。光秀の辞世は、そのような見方のもとに創作されたと言える。「順逆はただ一つのもので、人の踏み行ふべき道理であり、心の底まで突き通る。五十五年の人生は、今根元（本来のあるべき所）へ戻る」というような意味で、仏教色の濃いものである。光秀は仏教の体現者として造型されているのである。

以上のような『明智軍記』的な光秀像は、西鶴当時の常識的な一つの見方であると考えられる。光秀の辞世は、西鶴没後の創作であり、西鶴はそれを知ることにはなかったが、当時の光秀像の集約されたものであろう。また本能寺の変に対して、信長を仏敵とし、光秀を天罰の代行者とするような見方も一般的であったと考えられる。そのような見方のある中で、西鶴は本能寺の変についてどのような考えていたのであろう。

西鶴は織田信長を仏敵とする見方に否定的であつたと思う。『武道伝来記』（貞享四年（一六八七）四月刊）より一年半程後のものになるが、『新可笑記』（元禄元年（一六八八）十一月刊）巻二の二「官女に人の知らぬ灸所」に信長への視線が見える。その重層世界は信長の比叡山焼き討ち事件を重ねているが、そこでは焼き討ちを仏教の腐敗を正す正当な行為として取り上げていた（注12）。信長を仏敵とする当時の認識を否定しているのである。明智光秀については、『武家義理物語』（貞享五年（一六八八）二月刊）巻一の二「瘕子<sup>はくろ</sup>はむかしの面影」に取り上げているが、そこでは義理・道理を重ねる武士としている。仏教を重ねる武士としてではない。

西鶴は、信長の占夢譚と光秀の享年五十五歳説は熟知していたと考えられる。信長の占夢譚「信長公御夢ニ鼠出テ馬ノ腹ヲ喰破<sup>クサヤフ</sup>リシカバ其馬<sup>ウマ</sup>忽<sup>タチマツ</sup>死ニケリト」を取り込みながら、『明智軍記』とは異なつた信長、光秀像を造型しているのである。それは（d）（e）と関わる。

#### （d）（e）について…謡曲「白髭」のパロディ

（d）采女・左京の二人の美童が「簀笠に身を隠し、其ま、釣の翁になりて」、眼夢に拝顔しようとするのは何故か。

前述したように、あらずじ①②は仮想世界として設定されている。井上泰至氏が指摘するように、謡曲「白髭」のパロディとなつている。井上氏は具体的なパロディのあり方については記述していないが、「白髭」の筋を単純化して、あらずじ①②と対応させると、次のようになる。

i) 帝が不思議な御霊夢のお告げを受けられたので、白鬚明神へ

勅使が立った。

ii) 勅使は、釣りする翁と若者にあう。翁は白鬚明神の縁起を語る。

iii) 勅使を慰めようと、白鬚明神が現れ舞樂を奏し、天女が天燈を捧げ、龍神が龍燈を捧げて、舞をくりひろげる。

1) 「安土の城下は、むかしになりぬ」(織田信長は鼠が馬の腹を喰い破る夢をみる)

2) 眼夢は庵室に籠り禪学に没頭する。大願を追究する。

3) 采女・左京は琵琶・琴を弾き連れ、眼夢に拝顔しようとする。

i) の帝の霊夢の内容はわからないが、白鬚明神の縁起に関わるものなのであろう。そのことを糾そうとするために勅使が立つ。1) 信長は夢を占う。安土の未来を、その正当性を問うのであろう。光秀は安土の未来を問うための使者なのである。「眼夢」というネーミングには、信長の夢と光秀の大願(夢)が重ねられているのであろう。ii) で釣りする翁は白鬚明神の縁起、釈迦の仏法結界の地で、永久に栄えるべき地で、正当な地であることを語る。それに対して2) 安土は滅びてしまう。本能寺の変で光秀は信長を討つが、それは信長の安土の城下は、仏法結界の地でなかったことを意味する。光秀の心に描く新しい武士の世界の実現を目指したものである。iii) では勅使は歓待されて、白鬚の縁起を受け入れることになる。3) 采女・左京の琵琶・琴の連れ弾きは、天女と龍神の舞樂に相当するが、眼夢の対応はここから大きく異なることになる。勅使のように白鬚の縁起をそのまま受け入れることはしないのである。ここからは「白鬚」の単純なパロディではなくるのである。

(e) 眼夢は琵琶・琴に合わせて一旦は「阿房宮賦」を歌いながら「江

はよく舟をうかべ」云々、「おこなひのさはりなり」と窓を閉めようとし、さらに二人の対面を拒絶するのは何故か。

平尾修理の造型に「天武天皇の末裔にして」とあった。前述したように井上氏は、『類船集』の「老翁」の付合に「釣」「清見原天王鈴鹿山に入老翁に宿かり給ふと也」とあり、「眼夢が天武天皇の血を引く高家に設定されていることと通じる」としている。『類船集』には続けて「湖の七度まであしはらになりしをまさに見たりしとは白鬚也」云々、ともあり、謡曲「白鬚」から天武天皇を想起することは自然なことであらう。

しかし、清見原天王が老翁に宿を借りることは、『源平盛衰記』巻十四「三井寺金義浄見原天皇の事」に見えるもので、『盛衰記』では大友皇子と戦う壬申の乱を描いている。また、「湖の七度まであしはらになりし」云々は、『太平記』巻三十八「彗星客星事付湖水乾事」に見えるもので、「天地ノ変」「人事ノ変」を示し、「宮方蜂起シタリ」を告げるものである。その意味では、謡曲「白鬚」を想起させるものではあるが、直接的には、「天地ノ変」「人事ノ変」を想起させるものなのである。

言い換えると、冒頭文「千鶴万亀のすめる江州の時津海、風絶て、浪に移ふ安土の城下は、むかしになりぬ」に続いて、「天武天皇の末裔」とあることから、壬申の乱を想起するのが、より自然であるということである。天智天皇の皇子である大友皇子と弟である大海人皇子(天武天皇)の争い、それ故に近江大津宮は荒廃してしまったのである。一方で、二人の美童の釣りの翁となつての連れ弾きから白鬚へと至るが、天武天皇↓壬申の乱↓近江大津宮↓白鬚明神という流れの方が、冒頭文に取り上げた、武士(天皇)の世の変遷に

は対応しているのである。

あらすじ①の「天武天皇の末裔」が、壬申の乱を想起させるシグナルであることは明らかであろう。あらすじ②（ア）では、それを受けて謡曲『白髭』のパロディとして采女・左京を釣りの翁として登場させる。あらすじ②（イ）では、その二人に対して眼夢は、一旦は「南江のおもしろや」と歌ったが、すぐに気を取り直して、「歌台暖響春光融々、舞殿冷袖風雨凄々。春秋のしづかに、世の替れる有様、覚る間もなき夢なり」と、その過去の夢を否定する。「しばしも是に氣をうつして」即ち執着すると、「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理」で、「おこなひのさはりなり」というのである。ここでいう「おこなひ」とは何か。眼夢は新しい世への大願を抱いているのであるが、それは仏教的な悟りではない。情誼的な殉死を否定するような新しい武士の世界を樹立することだとは想像しうるが、次の（フ）まで明確にされないままである。「明鏡に像の跡なく、虚空の色にそまざるごとく」と過去の情誼的繋がりへの執着を断ち切って、戸車を閉めようとする。

ここで嵌め込まれた詩歌・文辞は、壬申の乱を受けて「世の替れる有様、覚る間もなき夢」を列挙し、いくつかの本能寺の変に対比する戦乱を想起させようとしているのであるが、なかなか複雑な謎かけである。

「歌台暖響」云々は、諸注に杜牧「阿房宮賦」（『古文真宝後集』）の一節とする。秦の始皇帝の広大華麗な阿房宮が、「楚人一炬」で空しくなったというもので、秦が楚の項羽によって滅ぼされた「世の替れる有様」を想起させるものであろう。

それに対して「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理」以

下の文辞については、「新編日本古典文学全集」頭注は、『沙石集』（四上の二）、『太平記』（三十七）、『文選』『荀子』などから出て、『長門本平家物語』にも載ると指摘している。「明鏡」以下の文辞は『沙石集』（四下の八）を挙げる。文辞の類似からは、『沙石集』卷四上「無言上人事」および卷四下「道人可捨執着事」によるものと考えられるが、西鶴は『平家物語』や『太平記』ではなく、意図的にあえて『沙石集』の文辞を嵌め込んでいると思う（注13）。

是ノ故ニ江ハ能船ヲワタシ又船ヲツカヘス君ハ能民ヲメクミ  
又民ヲワツラハス水火等ノ人ヲ益シ又人ヲ損スル事ナスラヘテ  
意得ヘシ（無言上人事）

明鏡ニ像ノ迹ナク虚空ノ色ニソマサルカコトク身ト心ヲ練シナ  
スマコトノ道心ナルヘシ（道人可捨執着事）

ここには「君ハ能民ヲメクミ又民ヲワツラハス」とあり、君のあり方を説くものである。君臣のあり方を説く文章ではなく、君と民との関係を取り上げている。続く「明鏡」以下も、執着しないことを説く。全く別個の関わりのない箇所との二つの文を繋ぎ合わせているのである。「江ハ能船ヲワタシ又船ヲツカヘス」は、次に述べるように、元來「水ハ舟ヲ載スル所以、マタ舟ヲ覆ス所以ナリ」（『孔子家語』一など）に拠るものである。「江」は、「水」とあるべきところで、『沙石集』では「君」にあたり、「舟」が「民」である。「沙石集」独自の変更である。仏教的な修行や執着について説き、君のあり方を仏教的な人の道として捉えているのである。

『平家物語』卷三「城南之離宮」には、「君は舟、臣は水、水よく船をうかべ、水又船をくつがへす」の頭注に『孔子家語』一、『荀子』五、『貞観政要』などに拠るものであるとしている（注14）。その本文

は次のとおりである（注15）。

・ 夫れ君は舟なり。庶人は水なり。水は舟を載する所以なるも、亦舟を覆す所以なり。（『孔子家語』第一「五儀解」第七）

・ 君なる者は舟なり、庶人なる者は水なり、水は則ち舟を載せ、水は則ち舟を覆す、とは、此を之れ謂ふなり。（『荀子』巻第五「王制篇第九」）

・ 仲尼曰く、君は猶ほ舟のごときなり。人は猶ほ水のごときなり。

水は舟を載する所以、亦、舟を覆す所以なり、と。（『貞観政要』

巻第十「論災異」第三十九）（刊本では災祥篇）

これらの文辞では、君と庶人（人）との関わりを取り上げ、君の治世のための教訓とするものである。『沙石集』とは逆で、「舟」が「君」にあたり、それを載せる「水」が「庶人」なのである。君からの視線ではなく、庶人が君を支えることも、又覆すことも出来ると言う庶人からの視線なのである。それは「世の替れる有様」の道理なのである。

西鶴は、眼夢の大願を人の道に則した正当なものとして提示するために『沙石集』を想起させたのである。しかし、『沙石集』の文辞は、「世の替れる有様」には当たらないのである。「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆す」の文辞は『沙石集』独自の表現で、西鶴が『武道伝来記』に嵌め込んだ以外に、他に使用例が見当たらない。一方で、「君ハ舟ナリ、庶人ハ水ナリ」を言い換えた『平家物語』巻三の「君は舟、臣は水」の表現は『平家物語』以外にも多くみられ、こちらの方が人口に膾炙しているといえる。その意味では、西鶴は読者に一旦『沙石集』の人の道に叶う、執着を断つことを想起させながら、その「江はよく舟をうかべ」の「江」を君とする表現に違和感を持

たせ、次いで、「君は舟、臣は水」を想起させ、「世の替れる有様」に思い至らせようとしているのである。

『平家物語』巻三には、次のようにある。

君は舟、臣は水、水よく船をうかべ、水又船をくつがへす。臣よく君をたちもち、臣又君を覆す。保元、平治の比は、入道相国、君をたちもち奉るといへども、安元、治承のいまは、又君をなみし奉る。史書の文にたがはず。

『平家物語』には異本が多くあるが、それらにも類似の文辞がある。一例として元和頃の版本をあげる（注16）。

君ハ船臣ハ水水能船ヲ浮ヘ水又船ヲ覆シ臣ヨク君ヲ保チ臣又君ヲ覆ス保元平治ノ比ハ入道相国君ヲ保チ奉ルトイヘ共安元治承ノ今ハ君ヲ困シ奉ル史書ノ文ニ不違

『太平記』巻三十七「新將軍京落事」にも、類似の文がある（注17）。

君ハ舟臣ハ水、水能浮レ船、水又覆レ船也。臣能保レ君、臣又傾レ君トイヘリ。去年ノ春ハ清氏武家ノ執事トシテ、相公ヲ扶持シ奉リ、今年ノ冬ハ清氏忽ニ敵ト成テ、相公ヲ傾ケ奉ル。魏徴ガ太宗ヲ諫ケル貞観政要ノ文、ゲニモト思ヒ知レタリ。

謡曲『養老』（注18）

君は舟、臣は水、水よく舟を、浮べ浮べて、臣よく君を、仰ぐ御代とて、

『毛吹草』巻二（注19）

君は舟臣は水／いほあひもち／けずない上臆はならす

『西鶴大矢教』第百七「何門」（注20）



又公は舟臣は水海

「君ハ舟ナリ、庶人ハ水ナリ」を「君は舟、臣は水」と言い換えたのは、おそらく『平家物語』の独創であろう。君と民の関係を、君と臣との関係に置き換えたのは、「世の替れる有様」として「保元、平治の比は、入道相国、君をたち奉るといへども、安元、治承のいまは、又君をなみし奉る」を、世の一つの道理として正当性を付与するためであったと思う。平清盛による鹿ヶ谷事件への対処（安元の事件）、後白河法皇の幽閉（治承の事件）は、清盛にとって

は道理に叶うものであったのである。  
巻頭章で取り上げた「世の替れる有様」を整理すると、次のようになる。

|            |               |       |
|------------|---------------|-------|
| 織田信長       | ↑↓明智光秀        | 本能寺の変 |
| 大友皇子（弘文天皇） | ↑↓大海人皇子（天武天皇） | 壬申の乱  |
| 秦（秦王子嬰）    | ↑↓楚（項羽）       | 秦の滅亡  |
| 後白河法皇      | ↑↓平清盛         | 法皇幽閉  |
| 足利義詮       | ↑↓細川清氏        | 南朝蜂起  |

冒頭文の「安土の城下は、むかしになりぬ」は、本能寺の変を想起させるものであった。西鶴はあらずじ①②（ア）（イ）で、読者にいくつかの乱や変を想起させて、本能寺の変について考えさせているのである。読者は、その他にもさまざまな「世の替れる有様」を想起するに違いないが、それらはそれぞれにそれなりの道理のあるものとして納得するのではないだろうか。本能寺の変の道理は何か。それはあらずじ②（ウ）に嵌め込まれたシグナル（f）で明確

になる。

#### （f）（g）（h）について…殉死の否定

（f）二人は殉死を禁じられているので「先腹」を切るが、この行為にはどのような意味があるのか。殉死の禁令と関わるのか。

采女・左京は拝顔がかなわず、さらに勘当を言い渡される。二人はそれにもかかわらず「子細をたづねたればとて、よもや分ては語らせ給はじ」と、眼夢の意図を理解しえないでいる。眼夢は、二人は殉死することこそが最も武士らしいあり方であると信じていると見ている。情誼的な繋がりを第一とする武士であるとわかっている。勘当を言い渡しているのである。二人は、「腹死の事仕るまじき」と再三禁じられていることの意味が理解できていないのである。眼夢は二人に新しい武士のあり方への変更を迫っているのであるが、二人は「命を捨る所をのがれては、其名をくだすなり」ということで、「先腹切て」と、それも「腹二文字」に切つてあくまで情誼的あり方を貫くのである。眼夢も一旦は取り乱すことになるが、「我に先立心底、さりとは武士の子なり」と、二人を賞賛する。しかしそれは眼夢が求める武士としてのあり方ではない。眼夢は情誼的な繋がりによる忠義ではなく、新しい道理による武士を求めているのであるが、それでもなお、過去の武士のあり方を完全に否定し得ないのである。やはり忠義のあり方の変化、情誼的なあり方からの脱却の困難さを、二人の「先腹」によって浮き彫りにしているのである。それは本能寺の変における織田信長と明智光秀の関わりを象徴する。光秀は、情誼的な繋がりが、個人的な意志や能力を重視するあり方からの脱却し、新しい世における武士のあり方を目指し

ていたのである。

西鶴は、明智光秀は本能寺の変によって新しい武士の世を目指したものと位置付けていたと考えることができる。そのように読むことによって、采女・左京の「先腹」や、(g)その命名の謎かけなど、また異なった問題が重ねられていることに気付く。

(g) 采女・左京という命名には、どのような意図が込められているのか。

『明智軍記』によれば、山科小栗栖ノ里で手負いとなった明智光秀が切腹した後、進士作左衛門貞連と比田帯刀則家が、それぞれ「御先ハ可<sup>キ</sup>仕<sup>ル</sup>者」「莫大ノ君恩」と追腹を切る。進士作左衛門貞連と比田帯刀則家は、やはり情誼的な繋がりを重んじる武士としてのあり方を示している。進士や比田のような光秀の死に殉じた家臣はいたに違いない。明智秀満、明智光忠などの重臣は、坂本城で自害している。いずれにしろ本章は、すでに亡き者となっている光秀の生前の、あるいは死後の世界を仮想しているのであるから、謡曲『白髭』のバロディとしての二人が登場すればいいのである。その二人が眼夢の大願と異なる心底の持ち主であれば、本能寺の変についての光秀の大願を浮き彫りにするわけである。しかし、それを森坂采女・秋津左京という十六歳の衆道関係にある美童に置き換えたのは一つのシグナルで、何か意図があると考えるべきであろう。

『新編日本古典文学全集』の「森坂采女・秋津左京」の頭注には次のようにある。

モデルは未詳だが、采女・左京の人名は、仮名草子『雨夜物語』『藻屑物語』における、采女・右京の二人の若衆が、衆道の義理により相次いで自害した話から想起された命名であろうか。

仮名草子『雨夜物語』『藻屑物語』は、寛永十七年(一六二四)四月、浅草の慶養寺であった伊丹右京・舟川采女の自刃事件に取材したもので、両書は異本関係にあり、版本は存在しない。山の八『風流蟻峨紅葉』(天和三年(一六八三))、石川流宣『好色江戸紫』(貞享三年(一六八六))、作者不詳『男色義理物語』(元禄十二年(一六九九))などに利用されているが、西鶴は、『男色大鑑』巻三の四「葉はきかぬ房枕」(貞享四年)にほぼそのままのストーリーを取り込んでいる。大友雄輔氏は、『雨夜物語』『藻屑物語』の諸本を調査した上で、西鶴が依拠したのは、『藻屑物語』B群(筑波大本・中之島図書館本・神宮文庫本)系統の一書であったと推測している(注21)。大友氏の所説に従い、西鶴は『藻屑物語』を周知していたとして論を進める。

『藻屑物語』は、『雨夜物語』を含めて、よく知られていたものである(注22)。

桜川の侍従に仕える伊丹右京十六歳に、舟川采女十八歳が心を寄せる。志賀左馬助の仲立ちで衆道関係を結ぶ。將軍家は桜川の侍従のもとに御成り。新参の細野主膳が右京に恋慕する。主膳は思いを遂げることが出来ず、右京を討って逐電しようとするが、逆に右京が宿直中の主膳を討ち果たす。桜川の侍従が大名を招いてもてなしている夜のこともあり、右京は浅草慶養寺で切腹を仰せ付けられる。采女は慶養寺に駆け付け、二人同時に切腹する。「おなじく腹へつきたつる、(辞世、略)かくいひ置、右のかたへ引まはしけるが、後は互いにさし違ひ、臥<sup>打ちか</sup>かさなりて臥にける」

『藻屑物語』は、右京と采女の衆道物語であり、二人と桜川の侍従との間にはそのような衆道の関わりはない。衆道は情誼の繋がりが

の典型であるが、『藻屑物語』では、主君ではなく若衆同士の義理を描いている。それをあえて眼夢との関わりを持たせて仮想世界を美しく彩ったというのであろうか。これこそが、もう一つの背景世界を重ねていることを知らせる西鶴のシグナルなのである。第一層を素材、第二層を本話、第三層を背景世界とする作品構造については、『武道伝来記』巻一、四、巻五の一すでに論じている（注23）。

『藻屑物語』の右京・采女の自刃は、采女の殉死ということになるが、それは事件当時には禁じられているわけではない。殉死の禁令は約四十年後の寛文三年（一六六三）五月に口達があり、天和三年（一六八三）に『武家諸法度』に加えられ、厳しく取り締まられている。あらすじ②（ウ）で、采女・左京は「兼て「腹死の事仕るまじき」と、再三の仰せ」と言っている。『藻屑物語』の実事件のあった寛永十七年に殉死禁令を持ち込むのは、不可解ということになる。西鶴は、『藻屑物語』の右京・采女の名を左京・采女として嵌め込んで、その類似性から、読者には『藻屑物語』を想起させているのである。その上で、左京・采女が殉死の禁止に触れていることに違和感を抱かせようとしているのである。その違和感は、単に『藻屑物語』の情誼的・美的世界を取り込んでいるのではなく、右京・采女の主人である桜川の侍従を想起させようとするものであろう。桜川の侍従の屋敷に將軍家が御成りになっていた。ここで読者は、桜川の侍従と將軍家の関係に想到することによって、この巻頭章の背景世界を理解することになるのである。

桜川の侍従は、従四位の侍従、堀田加賀守正盛のことである。

元和六年（一六二〇）、二代將軍徳川秀忠の世子家光に仕え、家光の將軍補任後に近習出頭人として急速な昇進を遂げる。寛

永十五年には、信濃国松本十万石を領した。同年十二月に侍従に進み、寛永十九年、下総国佐倉に転じて、十一万石を領した。慶安四年（一六五一）四月二十日、家光の死去のあとを追って殉死した。年四十四歳であった（『国史大辞典』など）。

右京・采女事件のあった寛永十七年四月には信濃国松本の城主で、桜川の侍従（雨夜物語）では佐倉侍従の命名は当たらないが、それは『藻屑物語』の成立時期の問題であり、ここでは取り上げない。問題はこの堀田正盛が三代將軍徳川家光の死去のあとを追って殉死したことである。家光の死は慶安四年（一六五一）で、まだ殉死の禁令は出ていない。禁令そのものが表面化するののは、約十年後の寛文三年（一六六三）の口達である。しかし禁令が出るということは、すでにそのような機運が醸成されているはずである。「大猷院殿御実紀」（巻八十）家光の死去に際する記事にそれは明らかである。家光が重篤になり対面が叶わず、家門・諸大名などに思召しの旨を伝える記事に続けて、少し遡った日時の病床での記事がある（注24）。

（長松〈家綱〉、徳松〈綱吉〉は昼夜御病床に看侍する。保科肥後守正之は御病床に召され 大納言殿〈家綱〉の今後を託せられる。）

また下総国佐倉の城主堀田加賀守正盛并に老臣武蔵国岩槻城主阿部対馬守重次。呢近内田信濃守正信退出し。各その宅にて切腹し殉死す。（中略）大恩をしたひ奉る人々みな殉死せば。誰か幼主をば輔佐し奉るべき。これは思ひ留られんこそ。忠義といふべけれどとゞめける。（中略）此頃までは戦国の余習いまだあらたまらず。殉死を忠義と思ひ定て。かゝる人々もひたぶ

るに志を決したりとみへたり。

堀田正盛と阿部重次、内田正信等の殉死は、「戦国の余習いまだあらたまらず。殉死を忠義と思ひ定て」とあるように、否定されているのである。家光は寵臣である異腹の弟保科正之に次代將軍家綱を託しているが、それは主君と家臣という個人的な情誼的な繋がりを第一にして殉死を是とするのではなく、主家と家臣という新たな主従関係を築くことを期待しているのである。家光は新しい主従関係、新しい武士のあり方を期待しているということになる。ここで家光が堀田正盛等に殉死を禁じていたということにはならないが、そのような殉死を否定する機運が強くなったということであろう。それにもかかわらず正盛等は殉死することになるが、それは眼夢と左京・采女のあり方に相当する。

家光の衆道については広く知られていたものであろう。山本博之氏の家光の衆道、堀田正盛等についての論述をまとめると、次のようになる（注25）。

元和六年閏十二月、堀田正盛が小姓となる。

元和八年、酒井重澄が小姓となる。

この頃、家光は酒井重澄の屋敷へ通う。ある時茶席で家光が先に正盛に茶を点てたことを重澄が嫉妬し、茶碗を打ち砕く。（『改正武野燭談』）

寛永十年五月、酒井重澄は「奉職無状なれば」ということで備

後福山へ配流される。（『徳川実紀』）

加賀殿（正盛）出頭、花が降り申し候由候事（『公儀御書案文』）

二の丸へは、惣別誰も召しにて候はねば、年寄衆も参らず候（『沢庵和尚書簡集』）

御座をも直したる者にて候間、肌を見せ申すまじ（『葉隠』聞書十二）

堀田正盛は家光の愛情に応え、殉死に際して肌脱ぎしなかったと伝える。肌は家光のみのものということなのであろう。眼夢と采女・左京の関係は、家光と正盛等の関係と対比されているのである。酒井重澄は配流されて殉死はしていないが、寵愛の二人ということでモデルとされているのかもしれない。実際に殉死した内田信濃守正信（享年三十九歳）、阿部対馬守重次（享年五十四歳）が対比されているともいえる。

ところで、織田信長と明智光秀の関係を、徳川秀忠と家光親子の關係になぞらえるのはかなり無理があるが、家光にとつて秀忠は、將軍になる事を妨げる存在であつたかもしれないのである。

『武野燭談』（第五）に、次のような記事が見える（注26）。

家光公未だ竹千代君と申し奉りし頃は、父母の御寵愛、国千代君程にはなかりしとかや。斯かる事をこそ、東照宮聞召及ばせ給ひけめ。或時仰出されけるは、「竹千代兄弟に、久々御対面なき間、兩人の若君を、御同道にて御参りあれ」との御事故、御兄弟の公達引繕はせ給ひて、御祖父の御前へ出させ給ふ時、大神君御声を懸けさせられて、「竹千代殿は、是へく」と御同席、御上段の少し下の方に、御着坐なしまゐらせらる。国千代君も、続いて着坐なさるべく進らせ給ふを、大神君御照覧ありて、「止々勿体なし、国はあれへ参るべし」との仰にて、遙の下になほらせ進らせ、御菓子など出でても、「先づ竹千代殿へ進らせよ」と宣ひ、次に「国にも喰はせよ」との御心遣、附々の人々迄、各別の御会釈なり。右の趣を將軍秀忠公聞召され、

感じ思召しけるとかや。

徳川家康は長幼の序を明らかにしたということになるが、それは個人的、情誼的繋がりではなく、新しい体制としての武士のあり方を示したということになる。二代將軍秀忠はまだ情誼的な武士のあり方を是とするところがあったが、三代目の將軍としての家光はそのような情誼的繋がり否定する存在となっていたということになる。西鶴は宝永六年（一七〇九）成立の『武野燭談』を見ているわけではないが、それに記載された逸話に類するものは、何らかの形で知られていたであろう。

(h) 後日談が、「丹波路に入れる」結末となっているのは何故か。

後日談は何か不可解な印象を与える。あらずじ②の末尾は「平尾の家絶果ける」であった。平尾の家、国が無くなるということであろう。残された家臣達はどうなるのか。家臣達は、眼夢と違つて采女・左京と同じ情誼的繋がりをもつとする集団であるはずである。近習が一座しているということはどうか。やはりあらずじ③も仮想世界の延長なのであろう。そのことを踏まえて後日談は読む必要がある。

あらずじ③を、事件の展開に従つて単純化すると次のようになる。

(i) 同じ近習の関屋為右衛門は、左京は情誼的でなかったと国中に噂した。采女の弟求馬のいる一座で、若道にも違いがあると、采女のことをほめた。求馬は、「よしなき流布」と、為右衛門を切りはなした。

(ii) 求馬はすぐに左京の弟左膳の宅に行き、あまましを語る。為右衛門の一子次郎九郎が素鎧を持つて駆け付けてくる。

(iii) 左膳は次郎九郎を切り伏せる。「今ぞのき道」と二人は一家

をつれて、「丹波路に入れる」。「古今の稀者、是ぞ」と、「かたりつたへし」。

この後日談について、谷脇理史氏は「新日本古典文学大系」の「今ぞのき道」、「かたりつたへし」に、次のように注している。

一五今は国を立ち退こう。求馬と左膳は善、為右衛門と次郎九郎は悪役で、切られて当然という描き方をされているが、これまでの切合いは私闘・喧嘩の域を出ない。私闘・喧嘩は当然処罰の対象となるから、求馬と左膳は国を立ち退かざるをえないわけである。

一八「其はたらき聞伝て」（序）と同じく、はるか昔のことと時代設定するための結び。他にも多い。以上の後日談は、「敵討」を意識して導入されたと思われるが、実質的には喧嘩・私闘の域を出ず、敵討とはなっていない。もともと次郎九郎は親の敵討に失敗したわけだが、それはあくまでも添え物的である。「諸国敵討」として全体をまとめるための後日談を付加する印象があらわな本章を巻頭に置いていることは、伝来記が敵討そのものを興味の対象としているのではなく、武家の論理や行為のあり方に幅広く関心を寄せていることを表している。

「伝来記が敵討そのものを興味の対象としているわけではなく」ということについては、『伝来記』の全体についていえるのかどうか検討しなければならないが、本章については首肯しうる。しかし、後日談は「私闘・喧嘩の域を出ない」として、そのために処罰を避けて国を立ち退くとする解釈は首肯しえないものである。

(i) の敵討の発端に見るように、そもそもの発端は「私闘・喧嘩」



なのである。(ii)の敵討の展開で、次郎九郎が駆け付ける。ここで次郎九郎と戦ったのが求馬ではなく左膳であることから、「私闘・喧嘩の域を出ない」とするのであるか。求馬と左膳は同じ立場にある存在と見るべきなのである。(iii)の敵討の結末で、次郎九郎を返り討ちにしたことになる。これは「中古」の「高名の敵うち」(序)と見るべきものであろう。その意味では「古今の稀者」である。しかし、「かたりつたへし」となっても、それは眼夢の求める「武道の忠義」を実践したものでなく、情誼に基づく「高名」なのである。そのために「今ぞのき道」と、立ち退くことになる。仮想世界である表舞台からの退場なのである。

平尾の家は絶えているのであり、現実には処罰がありそうにもない。そこに読者は違和感を抱くはずである。眼夢は新しい武士のあり方を求めているが、采女・左京はそれに応えることはできなかった。他の家臣達もそのような情誼的集団であった。あらずじ①②を受けて、眼夢の大願が成就しなかった根本の理由を後日談は明らかにしているということである。情誼の繋がりを是とする時代は過ぎ去っている。求馬と左膳は、眼夢即ち明智光秀の領国丹波、すでに領国ではなくなくなってしまっているが、彼等にとつて過去の良き時代の領国丹波へ帰るしか道がなかったのである。

### おわりに…三層構造

巻頭章「心底を弾琵琶の海」は、明智光秀の本能寺の変に対する位置づけを主題とするものであった。明智光秀の本能寺の変は、第一層の素材にあたる。光秀の築こうとした新しい武士の世界、それを平尾修理・眼夢の大願として、第二層の本話を創作しているの

ある。西鶴は眼夢の大願を「中古、武道の忠義」と位置付けている。『明智軍記』のように、織田信長を仏敵とし、光秀を天の代行者、仏の化身とするような認識ではなく、古代からの武士(公家)の世の変遷を冷静に対比しているのである。天武天皇、楚の項羽、平清盛、細川清氏などの例を引いて、それぞれのあり方が新しい世のあり方を求めるものであるとしているのである。その上で、第三層の背景世界、今の徳川の世の徳川家光の事例を重ねているのである。

以上のような三層構造は、西鶴が嵌め込んださまざまなシグナルを理解することによって明らかになる。改めて三層構造を示すと、次のようになる。

|          |      |           |                     |
|----------|------|-----------|---------------------|
| 第一層…素材   | 織田信長 | ↑明智光秀     | ↑進士作左衛門貞連と比田帶刀則家、追腹 |
| 第二層…本話   | 大願   | ↑平尾修理(眼夢) | ↑采女・左京、先腹           |
| 第三層…背景世界 | 徳川秀忠 | ↑徳川家光     | ↑堀田正盛・安倍重次等、追腹      |

あらずじ③の敵討に関する部分が本話にプラスされている。素材・背景世界とは対応していない。それは『武道伝来記』が「諸国敵討」を類聚する意図があり、敵討を通じて武士のあり方を描こうとする趣向があるからであると考えられる。本書では情誼的なあり方をする武士の根強いあり方とその滅びとを、敵討を通して取り上げているのである。ただ『新可笑記』の完璧な三層構造には、まだ至って

いないということである。

# 注

- 1 羽生紀子『武道伝来記』巻五の「枕に残る葉違ひ」の検討―『新可笑記』の三層構造の先がけとして―（『武庫川国文』第九二号、二〇二二年三月）・『武道伝来記』巻一の四「内儀の利発は替た姿」の検討―黒田官兵衛・竹中半兵衛、さらに前田利家の逸話―（『武庫川国文』第九三号、二〇二二年一〇月）
- 2 前田金五郎『武道伝来記』の事実と創作」（『近世文学雑考』勉誠出版、二〇〇五年。初出・『文学』三四卷七号、一九六六年七月・横山重・前田金五郎校注『武道伝来記』（岩波文庫、一九六七年）
- 3 谷脇理史『『武道伝来記』の時代設定』（『浮世の認識者 井原西鶴』新典社、一九八七年。初出・『武道伝来記』論序説『文学』五一卷八号、一九八三年八月）
- 4 羽生紀子『『新可笑記』の重層性―巻頭章と草薙の剣盗難事件―」（『日本語日本文学論叢』第一四号、二〇一九年三月）以下の、『新可笑記』についての論考を参照願いたい。『本朝桜陰比事』については別稿を予定している。
- 5 羽生紀子『『新可笑記』巻一の四「生き肝は妙薬のよし」の構造―夢幻能の利用と家光・正之の主従関係―」（『武庫川国文』第八六号、二〇一九年三月）
- 6 井上泰至「西鶴武家物と刊行書―『武道伝来記』への一視角」（『近世刊行軍書論 教訓・娯楽・考証』第二章第五節、笠間書院、二〇一四年。初出・井原西鶴『武道伝来記』論の前提を疑う』（『第37回国際日本文学研究集会会議録』二〇一四年三月）
- 7 金栄哲『『武道伝来記』の二重構造―「平家」素材の利用方法から』（『筑波大学平家部会論集』第五集、一九九五年十一月）
- 8 以下『武道伝来記』本文は、「新日本古典文学大系」（谷脇理史校注、岩波書店、一九八九年）による。
- 9 安永美恵「腹二文字に引」考―『武道伝来記』巻一の一―（『筑紫国文』第一三号、一九九〇年六月）
- 10 『明智軍記』本文は、二木謙一校注『明智軍記』（KADOKAWA、二〇一九年）による。
- 11 野口隆『『明智軍記』の光秀没年』（『大阪学院大学 人文自然論叢』第七三―七四号、二〇一七年三月）
- 12 羽生紀子『『新可笑記』巻二の二「官女に人の知らぬ灸所」の検討―戦国を勝ち抜いた武将織田信長と比叡山焼き討ち事件―』（『武庫川国文』第八九号、二〇二〇年十一月）
- 13 『沙石集』は、元和四年刊本（国立国会図書館蔵）による。
- 14 『平家物語』は、『平家物語①』（『新編日本古典文学全集』小学館、一九九四年）による。
- 15 『孔子家語』は『孔子家語』（『新釈漢文大系』第五三卷、明治書院、一九九六年）、「荀子」は『荀子 上』（『新釈漢文大系』第五卷、明治書院、一九六六年）、「貞観政要」は『貞観政要 下』（『新釈漢文大系』第九六卷、明治書院、一九七九年）による。
- 16 元和頃版本（国立国会図書館蔵）
- 17 『太平記』は、『太平記 三』（『日本古典文学大系』岩波書店、一九六二年）による。
- 18 『養老』は『謡曲集①』（『新編日本古典文学全集』小学館、一九九七年）による。
- 19 『毛吹草』（正保二年刊）は、早稲田大学図書館蔵。

- 20 『西鶴大矢数』は『西鶴大矢数注釈』第四卷（勉誠社、一九八七年）による。
- 21 大友雄輔「『藻屑物語』『雨夜物語』の諸本―『男色義理物語』の利用箇所をめぐって―」（『近世文芸』一〇〇号、二〇一四年七月）
- 22 『藻屑物語』は『燕石十種』第四卷（中央公論社、一九七九年）による。
- 23 羽生紀子前掲論文（注1）
- 24 「大猷院殿御実紀」は『徳川実紀』第二編（『国史大系』第一〇巻、経済学社、一九〇二年）による。
- 25 山本博之『遊びをする将軍 踊る大名』（教育出版株式会社、二〇〇二年）
- 26 『武野燭談』は『国史叢書』（国史研究会、一九一七年）による。

（はにゅう・のりこ 本学教授）